第七に、眞善美の奥殿の扉が信仰によつて開かれると、驚くべし、死を越へて彼方の永遠の世界が見えてくる。朽ち果つる肉體の中に永遠に朽ちざる神の子の靈が盛られてゐる事が判然と我が裡に意識されてくる。丁度熟したる柿の實の奥に、柿肉は腐るとも、更に新らたなる姿に復活する種子の存在に氣づくが如きであらう。但し柿の種子は再び元の柿と同樣の木を芽生えさす故に、甦生であつて復活でない。我らが靈の中に意識する復活とは甦生でない。もとの肉體に生れ變るのでない。靈が新らたなる形體をとりて永遠の靈界に新誕生する事を意識する。不死なるものが、既にこの世に準備されつゝある事を知る。パウロの「外なる人は日々に朽つれども內なる人は日々に新らたなり」と云ふたのも之であらう。聖書は實に至る處にこの眞理を證詞し靈の永生を啓示する書である。この一事が失せたら聖書は無くなつて終ふ。世には往々聖書を最高の道德を敎ふるもの、或は現世社會改造の書、地上に於ける人間生活の眞理を說く書の如くに解するものがあるが、之は東と西とを取り違へたるほどの大なる誤謬である。無論聖書は最高の道德と現社會と全人類の福祉と改造の根本原理を敎へる。然し、それは枝と葉であつて根幹は天國の福音であり、現世を貫いた永遠の神の世界の示顯にある。第七にはこの永遠に亘る神の世界が啓示されてくる。

第八には、神の永遠に至る人類救濟の秘義と宇宙と世界の終末が心の奥の鏡に寫つてくる。天地を聖心のまゝに創造せし神は如何にして歷史を導き、何故に苦難を與へ、また如何にして全人類を完成し、宇宙を完成せんと爲し給ふか。今後來らんとする歷史の終結全人類の終末、世界と大自然と宇宙とが如何なる形に完成されんとするか、この最大問題が神の默示を通して豫知せしめられ、信ぜしめられこゝに新らしく靈眼が開かれてくる。聖書はこの一大豫言に對する曙の一大明星である。曙の明星の後には再び暗黑の夜の帷は天地を蔽はない。必らず團々たる旭日が耀々として東天に躍り出る。光一度來るや長夜の天と地は忽ち新しき裝に變る如く我らは新天新地の來る事を信じさせられる。

(四) 人生の根本革命

かくして我らの人生觀は根本的に革命させられ、五十年の人生は全く一個の靈的

産褥であり、大地は母の胎だ。また人生は神の永遠の聖座さして行く旅路の一本の橋だ。橋の上に永久の住宅と倉とを建てゝ安住の地を求むるものは誰か。幾千萬の同胞と全世界の人類が狹き橋上に永住せんとするから、かくも混亂と不安と焦燥と行詰が生じるのである。人生は橋なり、橋の上に家を建つべからずとは聖書が示す光である。

かくして、肉眼一度開かるゝや忽然として千里の遠きを見る如く、靈眼一度開眼するや永遠の神の世界は髣髴として靈の眼底に寫り來る。この光を手に持ちて、再び地上生活を顧みる時、恰も自然科學の理法と原則とを握つて、物理と化學の現象を凝視せば見ゆる物質の奥に不可見の世界を手にとるやうに見えるにも似て人生何の爲めに食ひ、何の爲めに生殖し、何の爲めに生くるや、生活問題の目的は何か、學術とその生む文明と文化の目的は何か、是れらが神に在りて豁然明示さるゝ。かくて目的と手段との位置が正しき關係に恢復する。故に肉性と智能とは夫々の立場に於いて正しくその使命たる靈魂發達の使命を成就せしむるに至る。此處に至りて始めて、種子に於て優劣を論せず、開花結實したる最後の楷梯に於いて何が優生者として最も必要なりしかを識別しうるに至るであらう。

優良なる遺傳素因の緊要なるは既に議論の餘地なきも、全人類の現況より見て、優良なる環境の重大を深く思はせられる。特に靈性の發育に對して宗教々育の一日も等閑に附し能はず、最大の力點を此處に置くべきを主張するものである。

第十四章　優生運動と宗教

ある論者は先天的遺傳の原理を餘りに偏重する爲め、稍ともすれば後天的優生の價値を不問に附し易い。之に反して、後天的教養の價値を偏重するものは、遺傳素因を餘りに輕視する癖に陷り易い。兩者は兩翼の如く兩輪の如きであらう。

人類問題を二つに分けうる。一つは外部より抑制するものと、他の一つは、內部より自發創生的に働きかけるものである。

家庭、教育、社會、貧富、道德、法律等は前者であり、信仰は後者である。信仰は自力創造の根本的水源池となる。この水源池のかゝる場合は、教育も道德、法律もみな水なき運河となる。運河の工事に重大な意義がある。然し夫れは水流を通ずる爲めである。過去三百年の文明文化は一つの大なる運河を堀りぬく努力であつた。それによつてスピード時代は出現した。されど餘りに運河工事の諸材料の調達と運搬に心とられて水源池の括栓が堅く錆を生じて栓の開閉が不自由を來たし、注水の量が急に減じて、遂に水面に浮ぶ凡百の大小船舶悉くが深き泥濘に膠着して動きがとれなくなり、遂に行詰つた姿が卽ち現狀である。

故に優生學にしても餘りに人爲的工事にのみ捕へられて、生命的靈流の根源池を涸渴せしめんか、却つて民族と社會を行詰まらしむる憂なしとせず。一つの新たなる學術とその應用の生るゝ場合に、いつも之を目的の港に漕ぎ行かしむる動力とプロペラーと羅針盤を要する。優生學は全民族を乘せて優越國民の目的港へと漕ぎつけんとする一大巨船である。あらゆる諸機關は優生學者によつて提供され、組立てられるであらう。けれども怒濤荒れ狂ふ人生の太洋に漕ぎ出でし後に、必要となるは石炭を提供する信仰である。

信仰を一面より考察すれば、道德問題であると云ひうる。また全人類の優越性の眞相は何乎、權勢か、富か、學術か、否、道德問題である。道德紊れて何の權勢か、何の富か、何の學術か。道德問題の中心點は神と人とが正しき關係に生くる一事に盡きる。對社會、對人關係でない。正に對神關係である。神との關係が不義の中に分裂することゝ、そこに罪の根が蔓り、罪の生ずる處に失敗墮落が起こり、失敗墮落の起る處、あらゆる知識と制度の亂用が來る。殊に優生學運動の如く、「肉性」の問題を主眼として

取り扱ふ優生運動に至りては稍もすれば最も惡用され、惡魔に手渡される憂がある。

實に人類最大の問題は道德問題である。人は屢々眞實の要求を忘れ、人類の最大問題が何であるかを忘れる。民族の優越性を希望しながら、眞實の優越性が何であるかを知らぬ場合が多い。一個人にとつては道德の根諦の確立が第一義である。一民族にとつては全民族の道德的水準線の最高位を占める事が最大問題である。劣生者の產まるゝ事の多き原因は何處に存する乎。ある者は云ふであらう。惡遺傳質の結婚にあると。然し更にその根元に溯れば、遂に國民の不道德に歸因する。ギリシヤ、ローマの滅亡したるは劣生者が多數を占むるに至つたからだと云ふ。然るであらう。乍併、そは結果であつて、その原因は國民を擧げての不道德、不倫行爲による事を忘れてならぬ。優生運動の奥に道德問題が控へてゐる。國民道德の背景なしに優生運動は砂上の樓閣に終るであらう。

人生の最大問題が道德問題にあるなどとは現代人の多くは考へない。道德地に墜ちて、國民はこの重大問題を國家の存亡問題として考へない。眞の國民の生命線は外部にあらずして、內なる道德問題にあるを忘れてはならぬ。多くは道德に失望し切つて、むしろ極端に無道德、あらゆる既成道德の破棄を企て、大なる危險を冒さんとしてゐる。今は實に歷史上、比類なきほどの道德蔑視の時代である。かかる時に道德壞亂の大旋風の中心點たる男女の性問題を扱はんとする優生運動は、果して直面するこの一大旋風を乘り切りうるだけの艤裝は成れりや否や。難破の憂目に會はざらん事を切に念願する、私は信ず。道德問題の基礎であり、根幹たる信仰問題を全國民に徹底せしめ、それと雁行して優生運動を爲すべきが順當であると。

宗教は實に道德の根本を確立するものであつて、斷じて社會運動でない。また文化的啓蒙にもあらず、勿論生活處世の方便でない。人間が進むべき眞の生活それ自體である。

道德問題は卽ち善と惡との問題である。惡を除いて善を廣めんとする。惡人を減少せしめて善人を增加せんとする。科學と哲學とは何が惡であり、善であるかを知らしめるであらうが、惡人を善人には造り代へてくれない。ただ信仰のみが惡人を善人に造り代へ、而して後善事を行はしめる。故に道德問題を換言すれば、惡人が罪を悔改め、罪赦され、新生して神の救にあづかるべき信仰問題に歸着する。端的に

言へば、罪より救はれて神の子としての新生活に入ること、この事實なしに道德問題は永遠に解決されない。

信仰ぬきの道德は澁柿に向つて、「汝の柿は澁い、甘柿のやうになれ！」と叫ぶ。澁柿の臺木の枝に鈴熟りし澁き果は止むを得ず、外貌だけを甘柿に似せて甘い風貌を裝ふであらう。苦い澁はなほその內部に潛んでゐるのである。從來世の道德論がこの範圍より出でない。自己の惡を知りつつ、惡に勝ち得ないで、人の前に於て善人らしき風貌をよそう生活、之が所謂お行儀のよき模範生である。かかる矛盾の環境に身をおくから、優良なる種子もやがて枯れ果てて終ふ。乍併、信仰の教へる處は、澁柿の實はそのまま熟らせておく。而して先づ第一に澁柿の臺木を根元より切斷して、甘柿の新芽を接木する。かくして優良なる新芽より生え出し枝に甘柿の熟するのを待つ。熟る實の悉くが澁のぬけた甘柿である。この生命の接木法が卽ち宗教の教へる信仰による新生である。かく論じ來ると、我らの信仰生活とは卽ち靈的優生運動である事が悟りうるであらう。信仰は先づ澁柿の木を甘柿の木に造り代へておいて後に甘柿を實のらす方法である。

更に聖書的に云へば、信仰生活とは澁柿の自己が神の貌たるキリストに接木されることを言ふのである。キリストに接木されたるもの、之を眞正の基督者と呼ぶ、信仰の光は、人は自力にて自己を救ひ得ず、また人の造りし文化は人類を救ひ得ざる事を指示する。世の自力主義に立つ人々はこの言を聞きて「否、人は人自らを救ひ得べし」と抗言するであらう。けれどもそは未だ自己の內的生活に對する認識が不足なる爲めである。人は自己の肺臟と口と胃袋にて生きてゐる如く思考するも、空氣あつての肺臟であり、食物あつての口と胃袋である。兩者協調し、天地融合し、神人相呼應して始めて生命の行進曲は進む。

信仰の內容は神の生命に接木される事だ。優越絕對なる生命的他者と生命の交換、血の結合をする事である。神との生命的融合を信仰と言ふ。かくして新生し來る生命が信仰生活である。この內容を總稱して宗教と言つてゐるのである。

卽ち生物學的に取扱ふ優生學を靈的に移せば、信仰の奧殿の扉の一枚は確かに開かれると思ふ。地に於いて解く處の眞理はまた靈界に於ける未見の世界を開く一つの扉であることを知る。

信仰問題の解決と信仰の國民化により、道德問題は確立する。道德問題確立して後、優生運動は磐石の上にその基礎を置く。國民的信仰運動ならずして、眞の優生運動はあり得ない。優生學と宗教。信仰と優生運動、これらの兩者が車の兩輛の如く、鳥の兩翼の如く兩々相擁して進まん事を望む。

第十五章　劣生者を如何になすべき哉

(一)　劣生者とイエスの福音の眞理

世には生れぬ前からの盲人その他遺傳による劣生者が多い。運命の惡戯だとして諦め去らんと努力する。あるものは前世罪業の因緣によると說く。然し諦めんとして諦め得ざるは斯かる不幸の淵に身を置く當事者自身である。暗黑と死の前に直面せる彼等にとつて一片な哲理は何の慰めにもならない。更に「惡遺傳に因るのだから致し方がない」と醫家の絕望的な宣告に對し、冷酷を憤慨する以外に何物も起らぬであらう。かかる敗慘者に對して、たとへ民族的向上を目的とする優生運動だからとて、同情もなく、この世から彼等を生き地獄に葬るは餘りに苛酷に過ぎる處置である。

然り、かかる劣生者をイエスは如何に見たか。イエスの肉眼には破れた五體が寫つたと同時に、彼の心眼には天使の如く聖く、瑕なく汚なき內在の靈が寫つたのであ

る。ある時、イエスが途を往く時、生れながらの一人の盲人が路傍に座して乞食してゐた。當時民衆はみな生來の盲人は祖先の罪の故なりとして、社會から葬られ、乞食になるより他に道がなかつた。現代に於ても劣生者は何とか社會の邪魔にならぬように處分しなければならぬと考慮してゐるのと變りがない。弟子たちは、この人生問題を目擊して不審を正したいと平素から願つてゐた。路傍に坐する生來の盲人を見るや、よき機會なりと、イエスに尋ねた。『師よ、この人の盲目にして生れしは誰の罪によるぞ、己のか、親のか』イエス答へ給ふ『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯はれん爲なり』と。このイエスの答は弟子たちには正に青天の霹靂であつた。弟子は生來の劣生者は祖先よりの遺傳か又は自己の罪故か二者何れかに違ひないと信じてゐた。然るにイエスはこの兩者を否定し、親の遺傳にもあらず、また自己の罪にもあらずと叫んだ。

右の言明は一見イエスの福音の眞理が遺傳學を否定する如くにも見ゆる。けれどもイエスの意は然らず。イエスにとつては肉體は衣裳であつて彼の問題は他にある。肉體は內部生命進展の爲めである。彼の眼は常にX光線が肉を透し、骨髓まで見ぬく如くに、內なる靈に焦點を合はしてゐた。肉體の不具なるは、その不具なるによりて靈眼の開かれん爲めである。神の業の彼の上に顯はれん爲めであると渴破された。此處に吾等の人生觀は正しくこの一言によりて百八十度の回轉が行はれる。イエスにとつては惡質遺傳の事實も乃至人生萬般の苦難もみな彼によりて神の榮光の現はれん爲めだと見えたのである。入信とはこの焦點の百八十度の回轉を云ふ。コンヴァージョン(Conversion)即ち悔改めとは「回轉」の意である。

イエスによつて指示されたこの觀點に立ち得ざるものは、人生の苦難及び運命の惡戲はどうしても不可解である。强ひて解かんとすれば、宿命觀か或は機械的因果觀の冷たい鐵鎖に繫がれざるを得ない、その結果は極端な否定主義か盲從的な諦めか卑怯な遁避かの外には逃れ道が無くなる。過去と現代にこの種の冷酷なる鐵鎖、然り牢獄の鐵鎖に數層倍勝る運命の惡戲に一生涯を飜弄され、死ぬに死ねざる不憫の人々が如何に多くあるか知れない。優生學者は彼等を如何に觀るのであらうか。溺るる幼兒を運命なりとして拱手傍觀し得るのであらうか。優生學が動ともすれば、この冷酷なる鐵鎖の行使者になり易き危地に立つを憂ふるものである。

(二) 否定より肯定へ

人生の奥に秘められたるこの深刻なる現實の問題に對しては、學術も法律も道德も醫術も全く無力である。また諦め主義を高調する宗教も、因緣因果の理を說く哲理も何物もこの人生の秘密を解き得るものはない。ただイエスの天來の福音のみが、この最大の暗雲を貫き通して、暗黑の中に天の光明を拜せしめ隨喜雀躍措く能はざらしめる。然り、キリスト・イエスの携へ來りし靈界の光のみが完全なる解決の鍵を手渡してくれる。『ただ彼の上に神の業を顯れん爲めなり。』この一言たるや簡なれども、意は天地と共に深長である。

更にイエスは言ふた。『われ審判の爲めにこの世に來れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん爲めなり』とパリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言ふ、『我らも盲目なるか』イエス言ひ給ふ、『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん。然れど見ゆと言ふ汝らの罪は遺れり』

「われ審判の爲めに、この世に來れり」とイエスは言はれる。遺傳學の敎ふる處は、正に之れ一個の怖るべき審判書である。自己一生涯の罪と不道德の果は世々末代にまでも及ぶ。劣生者の出產は確かにその家系にとりては審判の宣告である。されども肉體及び精神に現はれた災厄は、まだその傷は淺い。外衣の破れに過ぎない。永遠に亘る靈界の破滅に比せば、そは僅かに暫時の困苦である。「もし汝の右の目汝を躓かさば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて全身ゲヘナの火に投げ入れられぬは益なり」と。兩眼を失ふとも、永遠に救はるるならば五體が火に投げ入れらるるより遙かに優れりである。イエスは宣告せられる。「見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目となならん爲めなり」と。この一言の中に靈界の光が仰がれる。イエスは言ふ。見えぬ盲目は、盲目なるが故に、心碎かれ、神の光を仰いで、目明の見えぬ神の榮光の世界を拜せしめられる。されど見ゆる者は、見ゆるが故にこの世の物慾に捕へられ、誘惑に打ち負けて遂に生涯、見る爲めに生れし神の國を見失ひ、見えぬものとなつて終ふ。

『見ゆと云ふ汝らの罪は遺れり。』何と云ふ徹透せる天の聲ぞ。『汝ら盲目なりしならば罪なかりしならん。』何と云ふパラドックスであるか。

神は人生をこのパラドックスをもて光の發電所たらしめ給ふ。この逆理の眞理

が活躍してくる時、闇より光は忽然として現はれる。

若し人生に苦難と災厄と不幸が消滅させられる時代が來たならば、その時代は禍なる哉「見ゆる者は盲目とならん爲めなり」との豫言が成就さるべき呪はれたる時代である。不幸あるが故に、人は永遠の救を發見する。「困難は發明の母なり」との獨逸の諺は單に物質科學に當て嵌るのみでない。また同時に靈界の眞理である。遺傳によるか否かは暫く別問題として世に災厄と不幸と運命の存在こそ、人をして神を發見せしめ最大の賜物たる神の愛に生かしめ、人生苦を通じて、人類を永遠に救ひ出させんとの神の愛の賜物に外ならない。神は苦難の中に恩寵の泉を備へ給ふ。運命の惡戯としか見られぬ宿命的悲劇をさへ、神は代へて絶大なる恩寵の泉に化し給ふ。

イエスは過去と現在の如何に拘はらず、惱める凡ての者を無比なる希望と歡喜に滿つる使命觀へと飛躍せしめる。一切の苦惱、痛苦、悲哀、罪過は單なる過去の結果にあらずして、實に未來永遠への勝利と幸福の爲めに用意されたものである。一切の否定より一切の肯定へ！　冷酷なる鐵鎖より感謝に燃ゆる希望への飛躍がイエスの福音の中に躍然として湧いてゐる。

(三) 神の聖旨

イエスの目には一人の靈魂は全世界の富にもまさりて見えた。人生の一切は幸運にあれ不幸にあれ、健康にあれ、疾病にあれ、成敗利鈍一切が、靈魂の永遠の救の爲めに奉仕してゐる下僕である。惡遺傳であれ、劣生であれ、みな神の榮光の顯はれん爲である。然り、唯この一事を成就する器として神は人類の存在を地上に許しておられる。神の聖意は靈魂を愛して、肉體を愛し給はない。屢々肉體を苦るしめて靈を救ひ給ふのが神の愛であり、聖旨である。

あらゆる文化は衣裳であり、救靈は主體である。衣裳は身體の爲めであつて、斷じて身體は衣裳の爲めでない。現代一切の禍根はこの眞理の顚倒にある。救靈を目的とする福音的眞理を實行せしめ、文化をして追從せしめよ。ここに一切の矛盾を征服する鍵が存する。

地上に存するもの一つとして使命なきはない。劣生者の存在さへ、偉大なる使命

の存する事を知つた。この使命に生くる劣生者は、使命を知らずして醉生夢死する優生者に勝ること幾百倍であるであらうか。生ける小犬は死せる獅子にまさる。

優生學が一方に優生者の優遇を講ずると同時に、劣生者に對しては、彼等獨自の使命に生くるものとなさねばならぬ。こは實に宗教による救靈を措いて他にない。またこの一事が人生最高の大偉業である。神は偏り見給はない。神の智慧と知識の富は深い。その審判は測り難くその途は深遠だ。世の劣敗者と見ゆる者の爲に案外手近に天國の途を備へ、富める者の天國に入るは駱駝が針の穴を行くより難からしめる。

神の聖旨は現世的地上生活の飽滿にあらずして、永遠に至る救靈にある。故に、救靈に必要なる試練と苦難は永久に地上生活の存續する限り殘し給ふ。イエスは叫ばれた。「汝ら世にありては患難多し、されど雄々しかれ、我れ世に勝てり」と。宗教的眞理は、永久に患難の存續を力强く敎へる。問題は患難の除去にあらずして、患難に雄々しく勝利を擧ぐることである。然るに現代文化の極致は、人類社會より苦難を完全に悉く除外しうる事を豫想する者がある。こは怖るべき一大錯覺であり、認識不足である。今の人類は自己の造りし文化文明にて人類を救ひ得ざる事を見出しつつある。全人類の救は地より出でずして、天より降る。

かかる神を冒瀆せる豫想のもとに、神を否定して、ただ人間の努力と發明により人類の救を唯物的方法に求めて驀進する者は、是れ左手に高塔を築きつつ、右手に底なき滅亡の立坑を掘るものである。薄氷上に樓閣を築くよりも危險だ。先づ神の國に入るべき福音の眞理をもて基礎を堅うし、その上にあらゆる文化を建設せしめよ。さらば一切は働きて益となり、神の榮光の器としてあらゆる文化が祝福されるに至るであらう。

第十六章　優生者とは誰乎

(一) 優生學の宗教的意義

ガルトンが與へた優生學の定義に於ても、優生學とは未來代々の種族的性質を心と肉體的に改善する或は損傷する兩者の原因の研究なり」とある。また優生學の目的は最大多數の最大幸福を增進するにありとなす。

此處で考へたいのは優生學及びその運動が目標とする優生なる理想の人物とは如何なるものを言ふのか。この問題である。單に心と肉體とを改善すると云ふだけでは甚だ不徹底である。何をか惡と云ひ善と云ふか、この一事が決定しなければ過去と現在の惡が判明せず、また未來に待望する善が定まらない。改善せんと欲して爲すことがその結果に於いて改惡の事もありうる。

故に此處に私は宗教的見地から善と惡の意義を明らかとなし、更に吾等の熱求する最大の優生的人物とは如何なる人物を言ふのか、之を開陳しておきたいと思ふ。

善と惡との問題は、道德問題の最深部に横はる一大問題である。善とは何ぞや、惡とは何ぞや、之は確かに哲學上の一大難關である。大哲カントも深遠なる哲學的思案の極、純粹理性批判と實踐理性批判に於いて到達したるものは、絕對的至上命令である。彼は叫んだ「我は二つの不思議を見る。仰ぎ見る大空、腑して顧みる內なる道德律」と。大空に諸々の星晨が人間の勞作を超越して無限の彼方より無限の此方へ肅々として一定の軌道上を運行してゐる。ニュートンは之を科學的にその如何なる關係に公轉するかの數的關係を明かにした。然し何故にかくも永遠より永遠に肅々として運行するか。科學者は答へない、然し人はこの原理を心の中に認識する。認識するから原理が會得されうる。けれども人の認識に先行して諸星は運行してゐる。茲に神秘境の第一扉のハンドルに觸れる。更に深甚なるは人心の內部に於ける道德律だ。天の諸星が科學者によつてその理法の發見される前から肅然として運行を續けし如く、人の內部には人の善と惡との意識の前に、人の心を貫く絕對他者の力が働いてゐる。如何に可弱い不完全なる自己の內部にも完全なる善を要請する聲が聞える。如何に不道德の放蕩兒の心にも完全なる善を憧がれる不思議な

る力が働きかけてゐる。努力するほど愈々不完全を見出す我ら人類は、遂に自己の憧憬する完全善に望の綱を斷ち切つて、絶望の淵に破産してよかりさうなものである。自己に絶望してもなほ絶對善の境地を何處かに求めて止まないあるものが働いてゐる。恰も磁針の振れが大なれば大なるだけ南北を貫く磁力線の力はより強く働きかける。振れの角度に比例して力は強く働き、遂に磁力線の方向に一致して絶對安定の境地に連れ歸らずんば止まない如くである。人は絶對善を要請して止まない。

碩學カントはこの不思議なる至上命令の聲を彼の内部に聞いた。而してこの絶對善の要請から彼は神の存在を認識し、更にこの絶對善要請に對する應答として、死後の生命、靈魂の存續を承認した。心の清き者は幸福なり、その人は神を見得べしとイエスは教へた。然り、聖い心もて内なる聲を突きつめて行けば、カントと同樣に我が内部の絶對的聲に耳朶を打れるざるを得ない。此處に哲學より神への大橋梁がかけられてゐる。然し、カントさへ哲學的には善を取扱ひつゝ、最後の神の門まで達して、垣根越しに瞥見した丈けにて、神の大庭の中へは飛躍し得なかつた。こゝがイエスの云ふ「女の生みし中にて洗禮のヨハネほど偉大なるはなかりき、されど天國に於けるいと小さきものも彼よりは大なり」である。なほイエスは云ふ。「心の貧しき者は幸福なり、天國はその人のものなればなり」と、また幼兒を取りて「この幼兒の如くならずんば天國に入る能はず」と。――こゝに哲學の臺木を力强く踏み切るべき神の國への飛躍線がある。

哲學は絶對善と絶體他者の至上命令の聲を仄聞する處まで進みうる。然し宗教に於ては神の聖前に立つて哲學の最後の要請として働く絶對善が何であるかを幼兒にも首肯しうるように悟得せしめてくれる。こゝは論理の世界を越へた直觀の世界であり、而も超論理的合理の世界である。

神の光の下に立つと善と惡とは地上に於ける生と死の如く分明である。即ち善とは神の聖意に從ふ一切の業を云ひ、惡とは神の聖意に反するものを云ふ。然らば神の聖意とは何か。之は太陽とは何ぞとの問に等しい。天を仰ぎ見ること、その一つが最大の雄辯なる答である。人間には言はんと欲して論理を以て言ふ能はず、ただ直觀的に論理を超越して而もよく合理的に首肯しうる世界を把持してゐる。

「神」それ自體を悟得する事も同じくこの超論理的合理の方法によつて到達しうる善の本質も神の心の本質に合體する處にその要請が滿たされるのだから神を知らざるものには善と惡とは徹底して解つて來ない。從つて宗教上に云ふ罪の意識も神の愛と光に觸れて來なければ心の奥底から涙を流して悔ひ改むる本心は湧いて來ない、聖書が教へる罪に三つある。第一は善を知りて行はざる、これ罪である。（ヤコブ書四ノ十七）第二に不善と知りて之を改めざる、これ罪である。（ロマ書七の一九）第三に、凡て信仰によりて成さざるは罪である（ロマ書十四ノ十四）。即ちこれ神の聖意なりとの確信に立つて爲さざる一切の行爲は罪であり、惡である。

故に惡を改めて善をなさしめる「改善」とは、神の聖意に反する人物を造り代へて神の聖意に從ふ人物となさしめる事を謂ふ。

故に優生學とは、未來末代に至る種族の心と肉體とを神の聖意に從ひ得るように改造する道と、その原因を研究する學問だとの意に歸着する、

結局、優生學も登りつめれば、他の學術と同樣また人生萬般の文化と同樣に「神」の問題に歸着する、

(二) 見神の道

神の有無論その他宗教の本質の問題に就てはこの小著の目的とする處でないから觸れないが、ただ一つだけ最後に言及しておきたい事は、神とその顯現の關係である。

「神は靈なれば、拜するものも靈と眞とをもて拜すべし」とイエスは教へた。靈なる神は目で見るべきでない、靈感すべきだ。眞實なる神は人間の眞實と誠とを以て觸れねばならぬ。靈眼の朧なるものと不眞實なる心の前には神は永久に暗雲の彼方にある富士の靈峰の如きであらう、

然しながら、不可見の眞理の世界を現實の物質界の奥に見拔く眼力と同樣の眼力をもて靈界を凝視するならば、神は諸々の可見の現象界の中に自己を自現しておられる事を容易に看取し得る。神は我らおのおのを離れ給ふこと遠からず、我らは神の中に生き、動きまた在るのである。

第一、神は古今の世界歴史を通して自己を示顯してゐ給ふ。世界歴史存在の理由

は遂に全人願をして明かに活ける神を發見せしめん爲めの一過程にすぎない。各民族の歴史は神發見の道へと導かれてゐる。パウロが「世界とその中にあるあらゆる物とを造り給ひし神は、天地の主にませば、一人よりして諸種の國人を造り出だし、之を地の全面に住ましめ、時期の限りと住居の界を定め給へり、これ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出すことあらしめん爲めなり。」と言ふたのも夫れだ。茫々六千年の全人類興亡の跡はそのまゝ神が幼兒を導く如く全人類を導き訓育し給ふた足跡である。歴史は正しく神の足跡だ。白皚々たる雪道に點々印せられたる足跡を見てさへ、我らはそれがその本體が何物でありまた何れの方向に行くかが計り知られるであらう。世界歴史は正しく神の足跡の印だ。

神の顯現の第二は、神自らが造り給へる大自然界がそれだ。大自然界は正しく神自らが書き給へる一卷の活ける著作だ。神の心を求めて、之を讀む者は自然界の一々の理法と現象とを通じて神の心の音譜を發見しうる。自然科學に於いて我らが原理法則と稱するものは、之れ正しく神の前に於ける靈界眞理の地上への投影像でないか。

第三の神の顯現は、「眞の人」を通じて顯はされる。

古來佛教徒は釋迦の人格の中に表現された神格をレンズとして神に觸れた。儒教を信ずるものは孔子の内に宿りし天の光を見て天地の心にふれた。また神道を信ずるものは、祖先の人格に寫る神の「至誠」を通じて天地の靈を拜した。然り釋迦も孔子、老子、ソクラテス、夫々の聖賢の心奥に宿る光は正しく闇夜に輝く諸々の星の如くに暗黑の人生行路に神の光を投じてくれた。若し今日の科學者の持つ分光器の如きものを持てば、かゝる星の一つの光からでもよく天に輝く光の本質を闡明し得たであらう。然し、過去に於ては、そこ迄靈的學術が進歩してゐなかつた。かゝる時代の到來を遠からざる將來に私は豫想し待望してゐる。然り、彼等諸聖徒は正しく暗夜に輝く諸々の巨星であつた。然るに此處に端なくも神は一人の神の人を地上に下し給ふた。「キリスト・イエス」こそその人である。彼は太陽の如くに東天に輝やき諸星は彼の前にその光を消した。

彼の出現は正しく全人類に一新紀元を劃するほどの一大事實であつた。神が地上全人類に歴史的發展を遂げしめ給ひしは、之れ活ける神を發見せしめ且つ人間の

眞實性を見出さしめん爲めであつた。歴史は正しくその産褥であつた。かくして全人類が久しく熱求待望し來りし神の姿にして、人間の完全なる模型をキリスト・イエスの人格に見出したのである。キリスト・イエスは神にして人人にして神であつたと、我らは信せざるを得ないほどに、彼は特異なる光を放つてゐる。私にも最初はイエスを釋迦、孔子と同樣に聖者の一人と見た時代があつた。然しながら、イエスを深く知れば知るだけ、學べば學ぶだけ彼は人にあらずして神の化身でなければならぬと驚嘆の聲が次第に我が内に高まり來つた。靈眼の開けるに從ひ、聖パウロと共に「キリスト・イエスは、げに永遠に讃むべき神なり、アーメン」と叫ばずには居られなくなるほどに、變化させられて今日に至つた。世にはイエスを初期の私と同樣に考へる人々の多き事を知る。乍併、更に神の光を求めて前進するならばキリストの心の中に神を見る體驗を萬人が持つに至ることを確信する。キリスト・イエスの中に宇宙の本質が顯現されてゐる。神はキリストの中に自己を暗示してゐ給ふ。「我を見し、もの、は、神を見し、なり」とのイエスの一言によつて、豁然靈眼開けて神を見奉り得た體驗を私は持つものである。

キリストの中に神の本質が顯現してゐる。キリストは神の貌である。キリストイエスこそ完全なる理想の人であり、全人類の目標として達すべき模範である。やがて到達すべき全人類の終局點はキリスト・イエスの人格にある。

最大にして唯一無二なる優生者は誰か、是れキリスト、イエスでなくて誰であらうか。キリスト・イエスの人格に近づくこと、それが優生への道である。キリスト・イエスの心より遠かること、それが劣生への墮落である。「我は世の光なり」と云はれたキリストの中に巨船「優生運動」の方向を定むべき羅針盤があると私は自ら確信してゐる。

曾てナポレオンは言つた。「アレキサンダーとシーザーとシャーレマンと余とは全世界を征服し、帝國を建設した。然し、それは單なる勢力の上に建てられた。獨りキリスト・イエスは、その國を愛の上に築いた。彼の爲に死ぬる者は幾百萬人あるであらう。我らにはそれが無い。ガリラヤ人は遂に勝ちて全世界を征服した」と。然り優生者とはナポレオン、アレキサンダーでなく、また巨億の富豪でなく、智者學者でなく、實に神の愛を具現したキリスト・イエスであつた。然り神の愛と義とを完全に

具現する人物！之れぞ眞實にして最大の優生者である。

今後の優生學と優生運動とがこの人類最高の目標を指して前進されん事を祈つて止まない。

第十七章　神の實證とその本質

(一)　超論理的合理の證明法

私は久しい以前より科學と宗教を論じ、屢々卑見を發表して來た。例へば拙著「近代科學と宗教生活」中にも見神七道を擧げ、第一、歴史的見神法、第二、物理的見神法、第三、化學的見神法、第四、理論的見神法、第五、直觀的見神法、第六、內觀的見神法、第七、聖書的見神法について論じておいた。詳細は同著書について見ていたゞきたいが、幾度繰り返しても、なほ足らぬを感ずるのは、見神の道である。こゝでは主として神の啓示の書たる聖書が見神の大問題について如何に教へてあるかを靜觀したい。

大自然界は神の自筆になる一卷の生ける著述であると私は言ふた。この中に神の眞理が明鏡に寫る如く啓示され、天國への鍵が、實に、此處にある。たゞこの不可思議なる鍵の用法を知るものゝみが、永遠に至る天國の扉を開きうる。イエスが「野の

百合を見よ、空の鳥を見よ！」とて野の花一つの中に天國の奥義を明示してをられる。如何にも深い眞理である。

神とその眞理について最も明確なる光を人類に與へる最良の書は聖書であると私は信じてゐる。而して聖書の核心は活けるキリストである。キリストが聖書から取り除かれたら聖書は亡くなつて終ふ。舊約聖書はキリスト出現迄の準備時代であり、新約聖書は神自らがキリストを通じて人類への自己啓示である。

聖書ほど明確に神を教へるものはない。然らば、聖書は如何に明らかに神の活きて在し給ふ事實を教へるか。以下聖書が啓示する見神の道について少しく研究して見よう。

先づ聖書の眞理について、私達が科學的に不思議に感ずる處は、聖書の何處にも『神の存在』に就いて論理的な證明法を示してゐない事である。

私たちの頭腦は事物の一切を科學的に證明してくれねば物事の存在を確信し得ないやうな一種の鑄型に鑄込まれてゐる。故に己が全生命を托すべき信仰の對照である「神」が、果して實際に活きてをられるか否か、この大問題を科學的に實證されねば、どうしても「神」に信頼し、全生命をかけて信仰する事が出來ないと云ふのも無理からぬことである。科學的實證法によつてのみ物事の實在が證據立てられるやうに馴らされた現代人にとつては、架空に見える神の全能よりも實際的なパンの一片がどの位合理的であるか知れない。現代人が物質萬能の文化と自己中心の生活を謳歌するのは、充分な理由が彼等にあると思ふ。然し、有難いことに、今日の科學は昨日の科學でない。最近の科學は實に驚くべき新天地を人類の前に啓いてくれてゐる。昨日まで「正しい」と思つてゐたことが、今日は既に考へ違ひであり、認識不足であつた事を教へられる。私たちは常に人間を研究の對照としながら人間が解らずにゐるが、いつも直面させられる大問題は「眞の人間とは何であるか？」との問題である。鹿を追ふ獵師は屢々山を見忘れる。また大海に棲む魚族の眼は大海の存在を見失つて居るやうに、神の巨手の上に乘せられてゐる科學者は、その巨大な神の手を見逃してゐる。

今まで醫學では人間は胸部を打つ鼓動と脈搏が停止した時が卽ち「死」の時だと診斷して來た。然し彼等にも、今や「何が人間の眞の死であるか」を眞劍に考へさせられ

る時代が到來した。最近には物理化學の方法で人工的に心臟の鼓動なり、新陳代謝の現象が何等の生命力を借らずして科學的に實驗が出來るやうになつて來た。此處に二つのガラス器が並んでゐる。甲のガラス器の中に化學的藥品を用ひて惹起させてゐる生物現象のロボットがある。乙のガラス器中には眞實の生きた生物が同樣な運動をしてゐる。何れが死物で、何れが活動だが、外面の機械的運動だけでは少しも區別がつかない。處が、ある時期の後、眞の活動が睡眠してその運動を休止したとするならば、機械論者は叫ぶであらう。「乙は死して、甲は生きてゐる」と。從來の醫學では、之は正當な判斷と認識であつた。然し、この判斷は果して正當な認識であるであらうか？　甲こそ死せるロボットであつて、乙こそはなほ生きてゐる活物ではないか。生きてゐればこそ、休止する事もあるのではないか。深遠なる物質科學研究の結果は、人間の生と死を單なる機械的運動の鼓動や脈搏や呼吸の有無だけを以て判斷してならぬ時代が到來した。

當代醫學の權威者たる某教授は、この問題に直面して考へ込み深い思索と研究に沒頭した結果、遂に彼が見出した新らしい眞理は次の一言であつた。「自分が生きてゐると自覺し得る事が、生きてゐる唯一の證據だ」と。

「自分が生きてゐる！」との自覺が失せた時が、即ち人間が死んだ時であり、「自分が生きてゐるのだ」と思へる時は、よし肉體が死んで無くなつてゐる時でも、その人は生きてゐるのだ。然し、反對に、如何に手足が活動し、彼の肉體が健康に見えても、心の中に「自分が生きてゐる！」との自覺が亡くなり、無目的と無意識に過ごす人があるならば、眞實の彼は既に「死せる人」である。たゞ、死人が機械的にロボットの如くに動いてゐるだけに過ぎない。

故に、「人が生きてゐる」との事實は肉體の存否には關係しない。彼自らが「生きてゐるのだ」と思へる時が生きてゐる何より確實な證據であり、それ以外に、より確實な證據は他にないのである。

外面の機械的測定法や論理的實證によつて證明されて後に、始めて「實在」が證據立てられるのは、夫れは二次的價値の存在であつて、第一次的な本質的實在でない證據である。證明されて後に信ずるやうな神は、信ずるに足る眞の神ではない。實は、科學的證明法と云ふのは、第一次的な本質の實體に對して影の如く後からついて行く

ものでその實體存否の問題は生けるもの夫れ自身が「我れ在り！」との自證を持ち得る處に、證明の最大要素が存するのである。この一事が科學的證明法の基礎を構成する根本を貫く不滅の奥義である。こゝに唯一不動の確實な超論理的合理の證明の道が存するのである。

見神の大道も、この妙諦に觸れなければ、神の實在の根本問題は、解けないであらう。

(二) 神の實證

聖書は不思議にも、神の實在に就て證明を示してある個所が何處にもない。それほど迄に「活ける神」を明確に直觀してゐたのである。「我れ在り！」との明確な直觀に對しては誰人も之を科學的に證明を欲するものはない。「自分が生きてゐる！」との一事だけは證明を要しないほどに明確な自證の世界に屬する。若しも「自分が生きてゐる事を證明して下さい」とて醫師のもとを訪ねる患者があつたら、その人は生きていない無自覺の人であり、前記の一教授の定義によれば「死んだ人」である。

故に、自分が生きてゐる以上は、自分が實在する事の證明が不要である如くに、自分の中に「眞實の人」が生きてをれば、神が活きて實在なし給ふ事は證明を要しないほど明確な事柄である。「眞實な人」が我が裏に生きてをれば、唯に教へられないでも、罪と惡の暗黑さを知る。この暗黑の中から晴れ渡る大空を仰ぎさへすれば、誰人から天文學を學ばなくとも、輝く星晨の光明を實驗する事が出來る。星を天に見たものは、星の實在を信ぜずにはをられないではないか。聖書的見神法の呼吸は此處にある。聖書記者が、常に神を仰ぎながら、神の實在について、一言もその論理的な證明を試みてゐない理由が此處にある。彼等にとつて、神は『有りて在り給ふ』方であり、萬づのものゝ生命の根元で在し給ふ方である。

舊約聖書開卷第一の名句は『元始に神天地を創造なし給へり』(創世記一の一)であり、新約聖書ヨハネ福音書の第一句は『太初に言あり。言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神と共に偕り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし』(ヨハネ傳一の一——三)と。

劈頭第一から神の實在を確認して、神と造られし萬物の關係を教へてゐるのが聖書である。科學の最深最奥は、神の實在の氣配を直感せしめる處で停止し、哲學の極

致は神の實在を論理的に肯定せしめる處で立ち往生して終ふが、科學と哲學の最後の停止線が、聖書の出立線となつてゐる。此處に宗教の眞價がある。

或る人は言ふ。「科學や哲學には論理と實證があつて深遠であり、合理的であるが、聖書には哲學的思索がないから淺薄である」と。またある者は言ふ、「佛教には深遠幽玄な哲理があつて如何にも讀む者に深甚微妙の法を悟らせるが、聖書は單純なる事實の記錄に止まつて深味を感得し得ない」と。是れは東洋人の私たちが往々にして感ずる處であるが、これはまだ山麓の深林帶にゐんでゐる旅人の聲であつて、決して天空豁然と開からゝ高山植物帶の人の聲ではない。

キリストの宗教的啓示はいつでも「來つて見よ」である。「往きて汝らが見聞せし所を告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきゝ、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり。」（ルカ傳七の二二——二四）

私たちの眞心から欲求するものは、パンの製法の論理でない、滋養價値の說明でない、生命のパンそのものである。科學は製法の論理を教へるであらう。哲學は價値の說明をしてくれるであらう。けれどもパンは與へてくれない、聖書的信仰のみが永遠に至る生命のパンを手づから「取つて食へ」と與へてくれる。

歌人ダビデが詩篇十四篇にうたひ出たる歌に、「愚かなるものは心の中に神なしと云へり、かれらは腐れたり、かれらは憎むべき事をなせり、善を行ふものなし。エホバ天より人の子をのぞみて悟るもの、神に尋ぬるものありやと見たまひしに、みな逆きいでゝことゞく腐れたり。」と。腐れたる者の心は盲人の如くに神なしと叫ぶ。

世には神を否定する無神論者が多い。特に現代唯物的運動者にはそれが多い。けれども、如何に多くの盲人が「天に星なく地に花なし」と叫んでも、見ゆる眼を持つ人の心は之を「さうだ」と受け入れることが出來るであらうか。甲と乙、何れが正しいかは、自明の理である。

パウロは叫んだ。「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは、造られたる物により、創世の時より悟り得て明かに見るべけれは、汝ら言ひ遁るゝ術なし」と。人の眞實の心には、神の實在とその神性と能力は天地創造の太初から悟り得て明らかに見られるではないかと彼は言ふ。實に至言である。

更にパウロは言ふ「神を知りつゝも、尚ほこれを神として崇めず感謝せず、その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。自ら智しと稱へて愚となり、朽つることなき神の榮光を易へて朽つべき人及び禽獸、匍ふ物に似たる像となす」と。故に神の怒は不義をして眞理を阻む人の、もろ〳〵の不虔と不義とに對ひて天より顯はれるのである。神につきて知りうべきことは、彼等には顯著である。神自らが彼等の心に顯し給ふからである。

眞心の人は、神が在し給ふことを直感するばかりでない、神が如何なる方で在し、何を爲さるべき方であるかさへ辨へ知りうるのである。愚人ならざる限り、神の在し給ふ事は之を拒み得ない。

「請ふ。汝神と和ぎて平安を得よ、然らば幸福なんぢに來らん。請ふ。神の口より教誨を受け、神の言語を汝の心に藏めよ。汝もし全能者に立ち返り且つ汝の家より惡を除き去らば、汝の身再び興されん。汝の寶を土の上に置き、オルフの黄金を谿河の石の中に置け。さすれば、全能者汝の寶となり、汝の爲めに白銀となり給ふべし、而して汝は又全能者を喜び且つ神にむかひて面をあげん。汝彼に祈らば、彼汝に聽き給はん」とは舊約ヨブ記の一節である。之れ現代九千萬の同胞の一人々々に轟く天來の聲でないか。

(三) 神の見方

神に對する人間の思想に二つある。一つは無神論であり、他は有神論である。この二者の分岐點は一に物と靈との何れを第一義に見るかとの見解によつて定まる。無神論者は物を先にして靈を後にする。有神論者は靈を先にして物を後にする。二者何れを採用するかによつて無神論と有神論の二大世界が截然と區別されてくる。

昔は物を先にして靈を後にする事、即ち無神論が極めて合理的の如くに見えた。是れ、その當時の科學が物を先にする事が眞理なるかの如くに教へたからである。然るに新電子論に立脚する現代科學は物こそ影であり、電子こそ本體である。而して電子は宇宙生命より創造さるゝ事實を教へる。即ち靈こそ先である。物は靈の實體に對する影である事が科學的に確定さるゝに至つた。こゝに至つて、無神論の

本據は完全に破壞され盡したのである。

また人間自身が一個の靈的實在者である以上、なほ無神論を主張する者あらば、之れ天を仰いで星なしと頑張る盲目者たるを自稱するに過ぎない。無神唯物論を主唱するマルキストの最大の矛盾と欠陷は此處にある。必ず彼等は滅亡する。眞個の眞理追求者は活ける神に來らずにはおられない。

靈を先にし、物を後にする有神論者が、次に逢着する問題は、然らば「如何なる神が天地に在し給ふか」との問題である。

有神論の人々は云ふ。「宇宙は偶然的に生成したのでもなく、また自己の力で機械的に動いてゐるのでもない。宇宙は神によつて創造され、今なほ神の支配下にあつて聖旨成就の爲めに動いてゐるのだ」と。これが有神論の骨子である。

處で、有神論の考方が三つに別れる。

第一、自然神教

第二、萬有神教

第三、唯一神教

神を求むる者は先づ第一の自然神教の山門を通過し、次に萬有神教の仁王門を過ぎ、遂に唯一神教の本堂に參殿して、この中に活ける眞の神にまみえうるに至るのが原則である。

(四) 自然神教

大自然は神の自筆になる活ける一卷の書物である。自然科學の母とも云はれるガリレーは「大自然は數學的記號を以て書かれた一卷の書である」と云つた。此處に深い科學上の眞理の泉がある。なほ更に思索を進めると、一絲亂れない法則と原理、肅々として運行する無數の天體、また腑して視る顯微鏡下の驚くべき極小の整然たる小宇宙、誰しも「こは實に神の大作ならでは叶はぬ！」と驚嘆せぬものはない。目には見えねども神が在し給ふ。この宇宙は神の創造になるものだと敬虔な心に打たれざるを得ない。この宇宙、この天地そのまゝが神の心の表現である。この大自然の動きがそのまゝ神の心の動きだと納得する。

神は、實に宇宙の原因であり、天地の原理である。故に原理法則、天地の道理を通し

て神は探り得べきものだとの思想が湧いてくる。此處まで達し得た人は、自然神教の唱ふる神の世界にまで既に到達した人である。彼は自然神教の信者だと言つて少しも差支ない。昔から多くの科學者や哲學者の中に斯かる自然神教の信者が多かつた、天然を通して天然の神に至る信仰である。筆者もこの見地から出立して活ける神への求道者の一人となつたものである。

たしかに天然を通して天然を造りし神を見ることが出來る。一輪の野の百合、一羽の空の鳥からも神の聲を聞きうる。神の無聲の聲が天地に滿ち充ちてゐる。

自然神教の見方では、神は有る、宇宙は神によつて創造されたに違ひない。然しながら、創造せし神はこの宇宙より遠くに離れゐて、獨樂が自力で廻轉する如く、宇宙は自力で運行してゐる。故に人は神に賴る必要はない、だゞ神の定め給ふた法則とその目的に向つて自力で進めばよいのだ、法則に反すれば倒れるであらう。然しこれは運命だから諦めるより他に道がない天然は法則に依つて進み、人は道理によつて歩むべきだ。神は造物主であるが、攝理者でない。活きて眞近かに聖手をもて導いてくれてゐるとは思はれない故に、この種の信者の心には「祈禱の心」は起つて來ない、人事を盡して天命を待ち、何事も天然の法則に任せてあきらめて行かうとする。

故に自然神教の中には非常に崇高敬虔な信念が湧きながら、山門に立ちすくんで本堂への道を忘れたかの觀がある。私をして云はしむれば、この自然神教の信者は神の世界の玄關先だけを見て、奥の書院に主人と對談する事に失敗せる人々である。

更に奥深い靈界の眞理に眼が開けて後に再びこの立場にある時の狀態を顧みると、丁度醫者が人體を調べて、その構造の不思議さに驚き、仔細にその法則、原理を研究した後「これで人間が解つた！」と叫ぶのと同樣である。如何に肺臟、心臟四肢の驚くべき運動の法則や原理が釋然と判明したとてその人が盜人であるか、また聖人であるやは全く不明である。彼が眞實如何なる人であるかは、人體の構造を見るだけではどうしても分らない、靜かに彼の唇より洩れ來る「言」に耳を傾けねばならぬ。彼が何を語るか、何を思ふてゐるか、彼が何の爲めに生き、何を爲さんとしてゐるのか。彼の「言」によつてのみ彼の「心」が知られる。神を知るにも天然だけでは足りない、彼の「言」によらねばならぬ。

自然神教の缺點は此處にある。法則の神道理の神を自然神教は示してくれるが、

それ以上の奥深い神の御心を示してくれない。神の眞の心を知るには神の自顯たる神の「言」に待たねばならぬ。宇宙と大自然界に於ける原理と法則は人生の一大事實たる「罪」の何たるかを指示してくれない。また之を除く道をも教へない。

科學と哲學とだけでは、どうしても、神の內部世界に於ける深い眞理を教へてくれない。茲に於いて、神の聖旨の自顯に基く宗教に光を求むる必要が起るのである。人體の外形をのみ見つめた自然神教者は、更に一躍進して靜かに神の「言」になる活ける神の宗教に傾聽しなければならぬことになる。

古來日本國民が所有してゐた神の思想がこの自然神教の範圍に入るものが多い。「天道卽人道」の孔子の思想も之であり、「理卽神」の思想もこれである。また老子の說いた宇宙本體としての虛無なる「道」も、その本質が無爲自然である以上、自然神教的な見方である。自然は恬淡無欲、而もその內に偉大なる力を藏してゐる。この天然の中を貫く力そのものと同化する事を老子は人生の本質とした。人生と天然の奥に不可見、不可觸、然もたゞ靈覺のみにて觸れうる天地の實體が潛んでゐる。之こそ萬化の根本であると彼は言ふ。之を虛無と名づけたが、今日の言で云へば、之は「神」として表現すべき內容である。

孔子は老子よりも積極的な態度をもて修己活人の道德を說いたが、結局自然神教の範圍以外に出て居ない。天然の奥に貫く最高の力を「天」と呼び、彼は天地萬象の中に神を見た。然るに孔子の繼承者たる孟子は自然神教の立場に立つ孔子の神觀より、仁と義との眞理を强調せんとした。この仁(愛)と義の神の世界を端的に明かに啓示したものが卽ちイエスの宗教である。孟子の行く道は結局イエスに來らなければ徹底しないのである。

卽ち支那に於ける宗教思想は軌を同じくして、何れもその根柢を自然哲學と自然神教に據ゐてゐる。此處に特色があり缺點がある。自然界に於ける知識とその原則の上に宗教の根柢を置く以上は、如何に天然界に於ける力を理想化し、之に倫理的性質を賦與しても、眠つてゐる人の身體の何處を敲いてもその人の言が聞き得ないが如く、神の最も奥深い言をきく事が出來ない。どうしても、この一事は「歷史」と「人の心」を通して自現し給ふ神御自身の「言」に聞く外に道がない。この「言」を如實に示したものが卽ちキリストの十字架なのである。

故に私は思ふ。孔子を繼承した孟子の自然神教を更に誰人かあつて之を繼承して罪の惱みとその救の立場から神の本性を探し求むる人があつたとするならば、確かにとくの昔に支那に於いて聖書が啓示すると同樣の神の國の眞理を發見し得たであらう。さすれば「生命の道」をのみ求めて進みし極東亞細亞に、更に更に偉大な光が既に輝やいてゐたらうにと、今更のやうに殘念に思はれる。神の前には千年は一日の如く、一日は千年の如くである。今や孔孟、老莊の後を繼いで、百尺竿頭更に一歩を進め、儒教を山門として、奥深く本堂に見參する時の來れるを知る。

(五) 汎神論的見方

自然神教者は考へる、「宇宙は完全なる神の創作であるが、神は宇宙を離れて存し、現在の宇宙は獨り自ら完全を目指して發達してゐる。故に人は宇宙の道理に從ふことが神に從ふことである。道理は卽ち神だ」と。

處が、自然神教の考方とは反對に、「神が有る事は勿論だが、神は宇宙の外にあらずして宇宙の內にある。萬有そのものが神の身體だ　野も山も星も草も木も悉皆が之れ神の一部だ」と考へるのが汎神論である。この思想が宗教化したのが多神教であり。蛇も狐も岩も樹も太陽も風も神だとして拜するに至るのである。

けれども、この考方が正當でない事は少しく理智の光を持つものには直ちに氣づくことである。私の鼻や口や手足は私の身體の一部であるが、私自身でない。「私」と云ふ本體は肉體の何れの機關でもない、その中に住む「靈」そのものだ。私の住む家や屋根や軒は私の家の一部分であるが、主人公はその中に住まない。それと同樣に天地萬有は神の住み給ふ家ではあらうが、日月星晨、山川草木が神自身ではない。神は萬有を創造せし「靈」である。今なほ神の靈は萬有に貫き、萬有は神の中に動く。萬有自身が神でない事は明かである。

私は東洋的汎神論の中に非常に奥深い或るものに觸れるが、從來傳へられた如く動植物や山川草木が神なりとの幼稚な思想は、單に本堂に至る一階梯である。仁王門の傍に立つて、その石垣の一つを見て本堂の本尊だと云ふに均しい。速にこの仁王門を過ぎて本堂に到らねば眞の本尊は見えぬ

東洋に培はれ來りし汎神論的觀方は婆羅門教、印度教及び佛教によつて代表せら

れる。此處に非常に幽玄なる神の眞理の泉が未だ堀られずして殘されてゐると思ふ。汎神論は、眞の信仰の光に照らされて始めて活かされてくる。

古來、汎神論のねらつて來た處は、神とその世界の關係を哲學的組織のもとに極めて合理的にその原因を說明せんとする事にあつた。人の智慧より出でし合理的思索は論理的には完全に見えるが、その長所がまた致命的欠點である。萬有を神として、却つてその結果は無神に陷つて了つてゐる。例へば私たちはよく言ふ「四海兄弟、人類同胞」と。なるほど全人類を子弟の如く愛する事に於ては何の異議があらう筈がない、けれども若しも微力不完全な私たちが幾億の人々をみな同樣に眞の子供のやうに愛しようと欲したら、實際には誰人も愛してゐたい結果に陷つて了ふ。可弱い私共には全く人類を子供として考へて、一人も眞實の子供がゐなくなつて了ふ。獨子の爲めに生命を打ち込んだ時にのみ開けてくる深い世界は彼には遂に開けないで濟むであらう。愚かな私たちは余りに多くの人々を一時に導かんとして焦慮する時、誰一人導いてゐない事を見出す場合が甚だ多い。右と同樣に不徹底な汎神論は無神論と同樣の結果に導くことを記憶しなければならない。

(六) 唯一神教

無神論は神なしと云ひ、自然神教は神は有る、然しながら完全なる宇宙を造りし以上神はその行動に直接交渉なしと云ひ、汎神論は、神はあり過ぎるほど有る、萬有そのものが神だと云ふ。

處が唯一神教の立場では、神は宇宙の創造者であると同時に今なほ之を支配教導しておられる。神は唯一人の靈的實在者で在し、萬有は神の聖旨成就の爲めに支配せられてゐるのだと觀る。

神は靈に在し給ふが故に、幼子の如きいと小さな靈的實在者を靈ならざる全宇宙星晨の總和よりも尙ほ尊しと神は見給ふ。靈は「我れ生けり」との自覺を與へる。神は永遠の昔より「我れ在り！」との人格的實在を以て全宇宙の中に活き、全宇宙を聖心のまゝに支配せられる。

活ける靈なる神と直接に應答しまつる者は人の子の靈の外にはない。實に神の前には人一人は日月よりもまたヒマラヤ山よりも貴い。故に神はその本質の奧義

を天地萬有の中に現はさずしてペッレヘムの嬰兒の中に現はし給ふたのである。

我等は「眞の人」を見る事に依つて神を見うる。天地萬有、大自然は衣であり、冠である。ただ眞の人、ペッレヘムの嬰兒を見且つ知る事によつてのみ神を見且つ知る事が出來る。天然の原理と世界の哲學とを學び盡しても、神を知り得ないが、たゞ神の獨子キリスト・イエスを知る事に依つてのみ、神とその御心を完全に識りうる。

神を天地萬有の遠きに求めてはならぬ。之を近きに求めよ。先づおのが心を探り、神の光なるキリストの「言」に照らされて自己の本心を拭ひ潔めるならば、百吋のレンズに寫り來る如く、神の像は明瞭に人の心の內に寫り來る。

現代に於ける知識階級者の大部分が今や漸く自然神教と汎神論の境地迄向上進歩して來つゝあるかの觀がある。願はくは、これらの第一、第二の峠に永く腰を落ちつける事なく、活ける神の靈峰キリスト・イエスの道を求めて活ける神に直接にまみえん事を切望して止まぬものである。

(七) 神は愛そのもの

聖書に「愛する者よ、我ら互に相愛すべし。愛は神より出づ。凡そ愛ある者は神より生れ、神を知るなり。愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。」(ヨハネ第一書四章)とある。こゝに神を見るべき光が輝やいてゐる。地上の人にとつては九千萬哩の遠くにある太陽は手には觸れず、眼にも見えない。然し、唯一つ、太陽を見るべき道が許されてゐる。夫れは光を見る事だ。光を眼の網膜が受けさへすれば、天空の太陽は一點の疑なく鮮かにその實在を知られる。神樣も私たちの手にて觸れ得ず、眼にも見られない。乍併神樣から來る光を知り得たならば、神を見たものである。その光とは神の愛だ。

「神は愛なり」とは、神が人を愛し給ふとの意ではない。神は愛そのものであり、愛の別名であるとの事だ。故に神心の愛に共鳴を持ち得ない人は、遂に神を永遠に知らずにすむであらう。恰も自分の周圍に浪打つ音響に共鳴すべき耳の鼓膜のない人には、遂に永遠に音波の存在に氣づかないと同樣である。また聖人を聖人なりと知るには、多少なりとこちらに聖人に似通ふた聖い心の準備が無いと折角の聖人をも、「大賢愚に近し」とて愚人扱ひにして終ふ。その他技術上のことでも自分に多少なり

とその技に通じてゐないと神境に入つた演技は會得出來ない。神を知るにも多少なりと自分の心に神の心に通ふ「愛」がなければ、神は永久にその人には「無」になつて終ふ。

故に、「神は何處にありや」とて拾物でも探すやうな不用意では決して神樣に御目にかゝれない。金銀の鑛脈を探すのでさへ、それ相當の地質學や鑛物學の知識の用意を必要とする。ましてや天地の造主にして人類生命の本源たる活ける父なる神樣を探　求むるに、今の世の人々は餘りにも不用意である。かくして「神無し」など揚言するは以ての外の冒瀆であり、無智である。マルクス主義や世の無神論者は何れもかゝる大膽な盲目的判斷を敢て犯してゐる冒瀆者である。「愛なき者は神を知らず」とは彼等への言葉である。

人の心に、多少にても神心の愛があれば、それが種子となり、信仰により心の扉を開き神の光を受け入れるに從ひ、その種子は、春の若芽の如くに日々夜々成長する。初めは定かに見分け難かつた赤子の眼が、次第に母親の顏を明瞭に見あげるやうに神樣の聖顏を明確に仰ぐに至る。

神の愛のみが光の如くに天地に充滿してゐる。神の愛の滿つる處、そこが宇宙である。宇宙は神の愛による生命の光の滿ち充つる處だ。

神を全智全能と或る人々は云ふ。然し、智慧と權能の立場から神を見るは、その中心點を逸してゐる。なるほど神は大能を以て宇宙萬有を造り、地の基を置き、晨星を天に懸けし者、仇を報ゆる者、又忿怒の主、已に逆ふ者に仇を報ひ、已に敵する者に向ひて憤恨を含む者であつた。(舊約ナホム書一の二)神は爲さんと欲して爲す能はざることなき全能者であつた。また神は智慧をもて地を定め、聰明をもて天を置き給へり。その智識によりて海岸は湧き出て、雲は露そゝぐなり」(箴言三ノ十九、二〇)と、神の智慧は實に深くして量り難い。けれども神の全智と全能が神たるべき所以でない。權能と智慧は惡魔も之を持ち得る。けれども惡魔の何處を探しても見出し得ないのは、愛である。愛なきが即ち惡魔である。愛のみは神より出づ。惡魔よりは愛は出ない。神の本質は全能と全智に於てゞなく、愛に於てある。「愛なき者は神を知らず、即ち神は愛なればなり」とは千古萬古を貫く眞理中の眞理である。

故に吾等は權能と智慧の不足を歎くに及ばぬ。ただ願ふ處は、神の聖い親心の愛

に溢れん事である。全き愛は恐怖を除く。愛の中に恐怖ある事なし。愛と至誠とによつて、天地は滿されてゐる。エーテルよりも引力や磁力よりも遙かに優りて、神の愛が天地の中に充實してゐる事に注視しなければならぬ。

(八) 信仰の中心點

神の靈は天地の太初からあつた。神の靈があつたればこそ萬物が生じたのである。故に萬物が今私たちの眼前に存在する事が何よりも確實な神實在の證據である。自分の身體が生きてゐる事が兩親が生きておつた證據。眼、耳、鼻のある事が、私が生れる先きから天地に光と音響と空氣が此の天地に存在してゐた確實な證據、萬物が生々潑溂、今も天地に活躍してゐる事、我在り、人在り、天あり、地ある事が神在し給ふ何よりの明確なる證據である。神の存在の理由は自己の存在の如く、餘りに明白すぎて却つて見失つてゐるのである。一疋の魚が太平洋中に注んで、太平洋自體の存否を議論してゐるやうなものだ。魚は水から離れたら、泳ぐ事が出來ない。魚の泳げる事、それ自體が太平洋が在る何よりの證據であると同樣だ。

神が在し給はなければ、私たちは一時も平安と希望と愛の中に住んで行けない。これらの愛と希望と信とはみな神より與へられるものだからである。人間に如何に自分の中に肺臟と胃袋とがあつても、夫れ丈けでは生きられない。空氣と食物とが外から與へられなければ人は死ぬる。神よりの愛が外から人の中に注がれなければ、人は敵を愛したり、自己を害ふ者を祝する神心は絶對に肉なる人よりは溢れて來ない。

眞の愛は內より出るにあらずして、神より出づる事を知るべきだ。神の愛が生命となり、太陽の光の如くに、天地に聖靈として滿つてゐる。この聖靈を呼吸する事が「祈り」であり、之を受けとる事が「信」である。

故に、私たちが、天地の主なる神を信する時に呼吸のつき始めた幼兒の如くに、神の生命と相通じ、神の臨在が始めて明確になつてくる。即ち「信じて後に神が知らるゝ」との原理が此處に成立するを悟る。而して信ずるとは、道理に反した事を無理に信ずる事でない。信ずる心は我が裏に自然に起る神の恩惠による作用である。春風の吹く處に、おのづから新芽のめばえるやうに、神の聖靈の訪ふ處に、自然と人の心に

信ずる心が起つてくる。故に信仰そのものも神よりの恩惠による事を知る。かく考へて來ると、今迄私たちが何事でも「俺が、俺が」と自己を先きにし、權利を主張してゐた事が、何と云ふ大きな量見違ひであり、天地の眞理を取り違へてゐた事に氣づくでないか。自分の力で生きてゐたと思ふたのが根本的な考へ違ひであつた。實は私たち全人類は神によつて生かされてゐたのであつた。この一事の發見が信仰による人生觀の最大中心點である。この大發見なしに、天地宇宙と人生の眞理は見えて來ない。靈眼が開かるゝとはこの眞理に氣づく事である。此の一事によつて暗黑は光明に、絶望は希望に、患難は感謝に一轉してくる。無意義と矛盾に見えた人生が、かくして輝かしい光に包まれた新裝の淨土と變つてくる。

「愛は神より出づ」と。何と云ふ眞理の聲であらう。「凡そ愛ある者は神より生れ神を知るなり。愛なき者は神を知らず。神は愛なればなり」と。一々の聖者の言が「然り、然り」と眞心からうなづかれるでないか。

(九) 生命のパン

一體「人」は肉でない、智慧でない。また衣食住を欲する意慾が人の本性でない。「人」は實に神を父とあがめる子たる「靈」だ。どう考察しても、人間界の現象を結果より原因へ、更にその原因へと見つめて行くと、人間の本性はどうしても「靈」そのものである。人間生活とは靈と肉との觸れ合ひを云ふ。電氣が觸れ合ふ處に火花と熱と力が發現するやうに、人間の觸れ合ひなる社會は神心の愛と朗らかな聖さと神の力とが現はれる處だ。醜惡と暗黑と分裂の生ずる處ではない。そこは決して眞の人間が住んでゐる處ではない。

如何に肉體が強くとも智慧が無ければ、その肉體は用をなさない。また如何に智慧が充滿するとも、彼の心が邪惡ならば、その智慧は却つて惡用されて終ふ。また如何に善事を欲する心があつても電流の切斷されたモートルの如く靈力に缺くる人は、重症患者の如く行詰つて終ふ。再び云ふ。「人」は肉でない、智でない、慾でない、神と偕に永遠に生くべき靈だ。

肉體は家の外廓であり、智識は內部の機械設備であり、慾望は山積された諸材料だ。然し、もし此處に主人公たる靈が不在であれば、彼は蜘蛛の巣の張る空家の如く、また

强盜の隱家になるばかりだ。今の我等國民の內容がこの空家の狀態でないか。

體育とスポーツを奬勵するのも惡くない。學校で智識を磨くのも善い事である物質の充實を計るのも結構だ。けれども、現代の如くに人間の本尊たる靈を昏睡狀態のまゝ放任しておいては、他の諸々の文化の一切は却つて墮落と腐敗の原因となるでないか。これでは何物もなかつた方がましではないか。

人間の本尊は靈そのものだ。靈にさへ天の光と惠の露が潤るほへば、巖上に落ちし松の實の如く、よし環境は貧弱であり逆境にあつても山なす大巖を眞つ二つに打ち破つて千歲に榮え行くでないか。環境が人を造るのでない。一切の環境を乘り越えて新らしい環境を創造する不思議なる力が人の中に宿つてゐるのだ。この本體を目覺ましめ、この本性をして新天地を創造すべき眞理の道に立たしめる事が自力更生の正道である。

靈は人間の本質であり、肉體は假の宿だ。靈は肉體の中に住んで、自動車の運轉手の如へに自由自在に肉體を操縱する。然し、自動車に供給するガソリンや機械油を運轉手に飲ませて彼を生かさんとするのは非常なる錯誤だ。パンと智のみにて行かれると思ふ世人は運轉手にガソリンを飲ませ、「これにて良し」と云ふものである。かゝる錯誤を爲す者は今の文明人中誰一人あるまい。處が、現代幾千萬の同胞の大部分がこの間違を敢て行つてゐるのである。故に近代文明なる重寶なる自動車が當初の目的を果さずして互に衝突するばかり、反つて殺人機になつて終ふのも決して不思議ではない。混亂と行詰の眞因は此處にある。運轉手なる靈に生命のパンを與へずして、機械的な部分を如何に修繕しても百年河淸を待つものである。

「人はパンのみにて生くるにあらず、神の言による。」人間の本質たる神の靈と交はり、神の靈氣を呼吸し、靈の淸水を飲み、眞の靈を食ひ、且つ神の光に包まれなければ生きられないやうに造られてゐる。

肉體の生命に必要なる一切は地上に供へられてゐる。それ以上に、天地の神は私たちの靈に生命を與ふべき一切を供へてゐる給ふ。肉體の爲めには穀物、水、衣類、家屋等が必要であるが靈には唯一つのものさへ食ひ、飲み、且つその中に住みさへすれば永遠に生きられるやうに人は造られてゐる　かゝる重寶なる賜物をたゞ私たちは、信じて受けさへすればよいのである。それ以上の事を何一つ爲ないで、私たちの靈

魂は生命を得、力づき、永遠の神の聖國に安住し得る。一切の物質を供給してくれるこの大自然界を見てさへ私たちは驚嘆の目を見張つて感謝したではないか。ましてやほんとの自分である靈魂の爲めに、無限の恩惠の供へられてある事實を發見しては、飛び上るやうに感謝感恩の念に溢れざるを得ない。

キリスト・イエスこそ私たちの靈にとつては眞の食物、飲物、衣物、住宅である。「我は天より降りし活けるパンなり。人このパンを食はゞ永遠に活くべし。我が與ふるパンは我が肉なり。世の生命の爲めに之を與へん」とあるのは夫れだ。また「我が肉を食へ、わが血を飲め！」と仰せられる。聖オーガスチンが穢れし己が姿に惱みぬいた時、「たゞ汝ら主イエス・キリストを衣よ！」との一言によつて彼は救はれた。彼はキリスト・イエスを衣として着た。その瞬間から彼の穢れし心は聖められたのであつた。またパウロが「噫、我れ惱める人なる哉、この死の身體より我を救はん者は誰ぞ！」と叫びし時、彼はキリストの肉と血を食ひ、且つキリストの中に住みて、彼れは救はれたのであつた。

「今やキリスト、イエスに在る者は罪せらるゝ事なし」とは彼の深甚なる體驗の聲である。

キリスト・イエスに在るとは、キリスト・イエスの中に住むとの意である。私たちは水の中や、地中に住んでは生きられない。たゞ地上に住んでのみ生きられる。人の靈は冷たい智識の中や汚い罪の中に住んでは生きられない。たゞキリスト・イエスの中に住んでのみ生きられる。地上に住みさへすれば、周圍に空氣あり、光あり、美しき天然がある。キリスト・イエスの中に住む時、我らは始めて神の世界の空氣を呼吸し、始めて神の光を拜し得、始めて神の美しい世界を見出すことが出來るであらう。

キリストに信じて救はれるとは、この一事を云ふのである。

人は神より遣はされし神の生命たるキリストを受け、彼の肉と血を食ひ、彼を光の如く慕ひ、彼の中に住まずしては生きられぬやうに造られてゐる事を知る。

この世にありて惱み多きは食ふべき眞の生命のパンを食はぬからである。空腹を感じうる事は生きられる幸福な證據である。心の貧しき者は幸福なる哉、いま悲しむ者は幸福なる哉、心に惱みを持つ人は幸福なる哉、彼等こそ天の恩惠たるキリスト・イエスを食ふべく祝福されたる人である。その惱みの日こそ幸福なる哉、その日

その時こそ神の眞の救にあづかるべき善き日である。我ら偕にキリスト・イエスに在りて永遠までも神を讃美するものとなり、斯くして人間として眞の優生者たり得んことを希ふて止まない。

この小著が幾分でも今後に於ける人生最高の目標を指示し、優生學の向ふ處を指さす、山麓の小さな木標の一本ともなり得れば望外の幸福である。

優生學と宗教　終り

優生學と宗教
定價金二圓

昭和八年七月二十日印刷
昭和八年七月廿五日發行

著者　佐藤定吉
發行者　長坂金雄　東京市麹町區富士見町二の八
印刷者　山縣精一　東京市神田區今川小路一ノ二
印刷所　山縣製本印刷株式會社　東京市神田區今川小路一ノ二
發行所　東京市麹町區富士見町二の八　振替口座東京二四二二七番　雄山閣

版權所有

文學博士 加藤玄智著

菊判上製函入 本文二百六十餘頁
定價貳圓 送料十四錢

神社問題の再檢討

―神道の本義と我が國の教育―

本書は神社對宗教問題の權威加藤博士多年苦心の成果にして、當局の神社政策と其學說の背景とに嚴正批判を加へ基督教徒の神社觀を是正し眞宗學徒の神祇觀を糺明し、憲法の信教自由と神社參拜問題に向つて徹底せる學的論斷を下して本邦教育の大本を顯昭す、秋霜烈日の正議快刀亂麻の論斷、周到なる學的力作を平易なる日常文辭の敍述に寄す、著者は純眞なる日本意識と至醇なる神道信仰に生きつゝ而も立論を公正なる理智の審判に求む、博士が東京帝大の神道講座に餞せる最後の講義は實に斯問題に對する獨特の鐵案であつたと云ふ、宗教家教育家は勿論敢て江湖の一讀を薦む。

略目次

（緒論）神社對宗教問題の重大性……現存神道の二大區分……明治以來當局の神社政策……神社神道非宗教論の破綻……神社側の對策……最近上智大學々生神社參拜拒否事件……常に蒸し返へす斯問題……斯問題の解決如何

（本論）國家的神道非宗教論の由來……國家的神道非宗教論の動機……宗教史上に於ける異思潮の離合……本問題の解釋と宗教學上に於ける宗教諸形態の考察……日本民族建國の精神と教育の大本……神社神道と宗派的神道……宗教とは何ぞ……帝國憲法の信教自由問題……神社參拜と學校教育……神社對宗教問題に對する世論の對立と歸結……神の超絕性と內存性……祈禱論……諸宗教の進化發展……神道と宗教調諧融和の歸一點

碑念記乎教宗は社神（最新刊）

乎!!斯問題解決の鍵鑰たる學界罕に見る金玉の大文字

東京振替麹町區東京二四二番　飯田町二七　雄山閣

文學博士 新村出序
文學士 曾我重郎著

東西喫煙史【最新刊】

菊判上製三百餘頁挿繪多數
定價二圓五十錢送料十四錢

小瀧淳著

四六判三百七十餘頁
優雅美本・上製函入

定價二圓
送料十四錢

一日一訓 佛陀のをしへ

最新刊

目次の一部

一・一 佛の出現
一・二 人の正邪
一・三 佛を念ずれば佛あり
一・四 善知識
一・五 貧富何れぞ
一・六 眞の修行者
一・七 一切智の獲得
一・八 善知識惡知識
一・九 衆望の歸嚮
一・一〇 健康の五因
一・一一 愚者の八法
一・一二 十惡二十果
一・一三 無言の訓戒
一・一四 最大なるもの
一・一五 次の佛
一・一六 眞の修行
一・一七 自己讃歎
一・一八 小恩をも報ぜよ
一・一九 老後の悔
一・二〇 比丘に貴賤なし
一・二一 願求以外

かの菩提樹下に大悟し沙羅雙樹の下涅槃に入りし佛陀後世五十年の生涯は總て此れ說法慈誨の生活であつた、誰か云ふ佛陀のをしへは苦海觀に過ぎ無明煩惱の連呼に過ぎずと、されど彼の無明の叫びこそ苦海を脫却し無明を剋服したる淨界への大獅子吼ではなかつたか。本文三百六十五項一日一訓の形式をとり冗長を避けその活用の妙を讀者の明識に俟つ、本書は敎理の知得であり一日一善自己修養のよりよき座右銘たらんとするものである。

東京振替麹町區東京二四二番　飯田町二七　雄山閣　電話九段 三七一四七 二五

ト29.8.八

最新刊

京大教授 文學博士 新村出序

文學士 曾我重郎著

東西喫煙史

菊判三百頁上製・定價二圓五十錢
挿圖多數行文流暢・送料十六錢

南蠻船來航數十年の後、煙草の輸入あり、喫煙の俗速かに流行して禁制の法度も及ばざりし徑路は、日本近世風俗史上に顯著なりしところ、之を同代の宗教史上に於ける吉利支丹の興廢に比して、其の事蹟相似たるものありといふべし。異端を攻むるが如きの害なかりしとは言へ、其の徑路と其の事蹟とを考察し進んで東西喫烟の沿革を精到に探究するは、文化史上閑却すべきにあらざること、蓋し論なかるべし。

本著者は學生時代より煙草を唯一の愛人としてこれに關する東西古今の文献を渉獵する事多年、其の全生活をこの研究に沒入し、今や世界に誇るべき本著述を完成す。其筆致輕妙洒脫。晦澁なる根本資料を以て而も巧みなる諧謔縱横の表現は、讀者をして最後の頁迄之を措く能はざらしむ。寔に本書は絶好なる趣味書であり、又文學書であり、史書であり、單に愛煙家、好軍家耳ならず一般學徒の必携書である。

目次の一部

煙草の渡來 天文以來の南蠻船——切支丹布教と貿易船——天正說慶長說——慶長十年說の誤謬——長崎の栽培——天正年間の煙管その他——朝鮮への影響——國內傳播原路

川幕府の禁煙政策 慶長中期の禁煙令——煙草耕作禁止——元和の嚴令——薩隅の一例——リチャード・コックスの日記——農民搾取と强制開墾策——土井大炊頭の禁煙——煙草關係者の逮捕——きせる狩り——白木屋の商才——異物喫吸——煙具の制限——耕作の制限——飢饉と農村の疲弊——有德院の善政

◇煙草は全人類の嗜好品の王座を占む◇

發行所 東京市麹町區飯田町二ノ六 振替口座東二四二番 雄山閣

終